教職大学院化の動向を見据えた
今後の学会施策検討のためのアンケート調査
報告書

全国大学国語教育学会

2025 年

目次

はじめに 3

（１）調査の目的と経緯 3
（２）調査方法と対象、アンケート回収率 3
（３）回答者の属性 4
（４）教職大学院が設置されている大学と回答のあった大学 4

１．教職大学院の現状等 5

（１）「Ⅰ 教職大学院生向け」調査項目への回答 5
①回答のあった教職大学院生の所属 5
②教職大学院生の回答集計 5
（２）「Ⅱ 大学教員・研究者向け」調査項目への回答 9
①教職大学院とその他大学院の設置状況 9
②リサーチペーパー・(研究)報告書の執筆義務 9
③報告書等の執筆義務 9
④現職教員の割合 9
（３）「Ⅲ その他の方向け」調査項目への回答 10
①その他の方の属性等 10

２．学会に対する意識・要望 11

（１）集計結果 11
① 全国大学国語教育学会との接点 11
② 全国大学国語教育学会での発表経験 11
③ 「国語科教育」への投稿経験 11
④ 他の学会での発表経験 12
⑤ 他の学会誌への投稿経験 12
⑥ 学会参加を薦める可能性 12
⑦ 学会入会を薦める可能性 13
（２）学会参加を薦める理由（自由記述） 13
（３）学会入会を薦める理由（自由記述） 20
（４）刊行物等に関する希望 26
（５）企画に対する希望 34

おわりに 37

はじめに

（１）調査の目的と経緯

本調査の目的は、昨今の教職大学院化の動向を受けて、本学会で今後どういった施策や見直しが必要となり実施可能であるのかを検討するため、会員（及び大会参加者）の皆様のご要望や現状を調査・整理し、共に考える土台を作ることにある。

この目的の下、2024 年 5 月 25 日の本学会鹿児島大会・理事会において、教職大学院生を中心とした所属大学院や院生の実態、本学会に対する要望等について調査を実施することが承認・決定された。本調査に先だって、調査項目のアウトラインを描出するため、本学会理事を対象としたプレ調査が実施され、本調査を行うワーキング・グループ（WG）が正式に組織された。このプレ調査の結果を踏まえて、WG による本調査のアンケート内容・項目の検討が開始され、調査項目のカテゴライズや組成検討を経て、2024 年 10 月 26 日の越谷大会・理事会、総会において、本調査の最終質問項目が承認・決定され、アンケート調査の実施がなされた。

（２）調査方法と対象、アンケート回収率

調査方法は、オンラインでのアンケート調査の形で行われ、回答者の属性によって以下の３種類のグループ毎に項目群を選択する形で実施された。「Ⅰ 教職大学院生向け」、「Ⅱ 大学教員・研究者向け」、「Ⅲ その他の方向け」の３種類である。

調査対象は、全国大学国語教育学会会員 1212 名に、2024 年 10 月 26 日・27 日に開催された第 147 回全国大学国語教育学会越谷大会に参加した非会員 124 名を加えた、計 1336 名である。調査開始日は 2024 年 10 月 28 日であり、回答期限を 2 週間後の 11 月 12 日とした。また、越谷大会参加の非会員に対しては、連絡先集約・確認後の 11 月 1 日に同じく回答期限を 2 週間後として同調査を実施した。

調査は全て Google フォームによるアンケートによりご回答いただいた。

回答数は、会員が 294 名（回収率 24.3%）、非会員が 14 名（回収率 11.3%）であった。調査依頼の合計数は上述のように 1336 名で、回答数は 308 名（回収率 23.1%）となっている。表１に依頼数、回答数、回収率をまとめて示す。

回収率は低めであるが、回答数が 300 件を超えており、本学会参加者の「意識」について一定数の傾向を見ることができるのではないかと考えられる。

（以下、入力フォームからのデータ・表集計の引用部以外の図表に、通し番号を付す。）

表１．調査の回収率と回答数

	依頼数	回答数	回収率
会員	1212	294	24.3%
非会員	124	14	11.3%
合計	1336	308	23.1%

（３）回答者の属性

大学教員からの回答が 145 名（会員＋非会員、47.1%）と一番多く、教職大学院生からの回答は 35 名（会員＋非会員、11.3%）に留まっている。その他は、会員 117 名、非会員 11 名、大学院（教職大学院）の修了者が 63 名、修了していない者が 43 名であった。回答者の内訳と回答率を、表２に示す。

表２．回答者の内訳と回答率

会員／非会員	属性	回答者数	回答全数に対する割合
会員	Ⅰ 教職大学院生向け	33	10.7%
	Ⅱ 大学教員・研究者向け	144	46.8%
	Ⅲ その他の方向け	117	38.0%
	小計	294	95.5%
非会員	Ⅰ 教職大学院生向け	2	0.6%
	Ⅱ 大学教員・研究者向け	1	0.3%
	Ⅲ その他の方向け	11	3.6%
	小計	14	4.5%
	合計	308	

（４）教職大学院が設置されている大学と回答のあった大学

教職大学院が設置されている 54 大学のうち、39 大学（72.2%）から回答があった。

１．教職大学院の現状等

（１）「Ⅰ　教職大学院生向け」調査項目への回答

①回答のあった教職大学院生の所属

回答してくれた 35 名は、17 の大学の所属となっている。

②教職大学院生の回答集計

教職大学院生からの回答の集計を、以下に示す。

②－１　属性

教職大学院生の属性については、現職教員が 17 名、学部卒業生が 16 名、その他が 2 名であった。

(2)教職大学院進学時のあなたの属性を教えてください。	
現職教員(派遣制度による)	12
現職教員(派遣制度によらない)	5
学部卒業生	16
その他(非常勤講師、定年退職教員、中途退職教員、一般企業等)	2
総計	**35**

②－２　国語科教育を専門としているか

在籍コースが国語科教育を専門としているかについては、13 名（７大学）が「はい」と回答している。

①あなたが在籍しているコース・専攻は国語科教育を専門としています(した)か。(例:国語・国文専攻等の場合は「はい」、教職実践・学習開発専攻等の場合は「いいえ」)	
はい	13
いいえ	22
総計	**35**

②－３　国語科教育をテーマにしているか

研究テーマが国語科教育であるかを問う項目については、２名（２大学）が「いいえ」と回答している。

②あなたの研究テーマは国語科教育を対象としています(した)か。	
はい	33
いいえ	2
総計	**35**

②－４　国語科教育を扱う科目の開設状況

在籍する大学院で、国語科教育を扱う科目が開設されていないと回答は5名（４大学）であった。

③あなたが在籍しているコース・専攻に国語科教育を主として扱う科目が開設されています(した)か。	
開設されていない	5
選択（受講している・受講する予定である）	4
選択必修（受講している・受講する予定である）	12
必修	14
総計	**35**

②－５　国語科教育を一部扱う科目の開設状況

在籍する大学院で、国語科教育を一部扱う科目が開設されているかについては、「主として扱う科目」も「一部扱う科目」も開設されていないと回答があったのは、７名（４大学）であった。

④あなたが在籍しているコース・専攻に国語科教育を一部扱う科目が開設されています(した)か。 *（例:「カリキュラム開発論」のうち1時間程度、国語科の指導法を扱うような場合）*	
わからない	1
開設されていない	7
選択（受講している・受講する予定である）	3
選択必修（受講している・受講する予定である）	9
必修	15
総計	**35**

②－６　修士論文の執筆義務

修士論文の執筆義務については、修士論文が「必須」と回答したのは8名（８大学）であった。

⑤あなたが在籍している教職大学院のコース・専攻において学位取得のために修士論文（リサーチペーパー、研究課題報告書等を除く）の執筆は必要です（した）か。	
執筆できない。	10
執筆は選択であり、執筆予定はない。	6
執筆は選択であり、執筆予定である。	11
執筆は必須である。	8
総計	**35**

②－７　リサーチペーパー・報告書の執筆義務

リサーチペーパー・報告書の執筆は、「必須」及び「選択」を含めると 31 名（17 大学）であった。「執筆できない」の１名は、修士論文が必須となっている大学、「執筆予定はない」としている 1 名の所属大学の他回答では「執筆は必須である」との回答もあった。

⑥あなたが在籍する教職大学院のコース・専攻において学位取得のためにリサーチペーパー、研究課題報告書等の執筆は必要です（した）か。	
執筆できない。	3
執筆は選択であり、執筆予定はない。	1
執筆は選択であり、執筆予定である。	1
執筆は必須である。	30
総計	**35**

②－８　研究費補助の有無

研究費補助があると回答したのは、５つの大学であった。

⑦あなたが在籍している大学院・コース・専攻に学会入会や大会参加等の研究費補助があります（した）か。	
わからない。	9
補助があり、活用している。	6
補助はあるが、活用していない。	1
補助はない。	19
総計	**35**

②－９　進学目的

教職大学院への進学目的は、①博士課程進学を選択したのが 9 件、②研究職への就職を選択したのが 7 件、③教育職への就職が 17 件、④教育職における昇進を目的に選択したのが 6 件、⑤特になしが 2

件、⑥その他が 12 件となった（表３・４）。博士課程進学や研究職就職が合計 16 件あり、教職大学院生の研究的志向が高いことがわかった。これは、学部卒業生の院生が教育職への就職を 15 件希望していることから考えると、学部卒業後そのまま教職大学院へ進学した院生は、研究職というよりも教育職を目指す傾向が強く出ていると見ることができる。教職大学院の設置目的（専門性の高い教員を養成）に合致した進学状況といえよう。

表３．教職大学院への進学目的（複数回答可）集計

	①博士課程(後期)への進学	②研究職(大学教員等)への就職	③教育職(小中高等の教員)への就職	④教育職(管理職等)における昇進	⑤特になし	その他
現職教員(派遣制度による)	2	0	0	5	2	5
現職教員(派遣制度によらない)	0	1	0	1	0	4
学部卒業生	7	6	15	0	0	1
その他(非常勤講師、定年退職教員、中途退職教員、一般企業等)	0	0	2	0	0	2
総計	9	7	17	6	2	12

表４．その他の進学目的

	その他
現職教員(派遣制度による)	現職教員としての専門性を高める、協働的、探究的な学びについて研究したかったため。教科指導の専門性を高めるため、国語科の研究がしたかったから、自己研鑽
現職教員(派遣制度によらない)	国語指導力の向上・指導に必要な知識強化のため、自己研鑽、自身の教育実践研究を進める、授業力向上
学部卒業生	理論的な基礎研究と教育に関する実践的な研究のどちらもできる環境だと思ったため。
その他(非常勤講師、定年退職教員、中途退職教員、一般企業等)	スキルアップのため、実践してきたことを科学的に振り返り、理論と実践を往還させ、新しい実践へつなげるため。

（２）「Ⅱ 大学教員・研究者向け」調査項目への回答

①教職大学院とその他大学院の設置状況

修士課程も教職大学院も設置されている大学は 42 校で、教職大学院のみが設置されている大学が 10 校、修士課程のみが 57 校、大学院を設置していない大学が 11 校ということになる。

②リサーチペーパー・(研究)報告書の執筆義務

回答結果は以下の通りである。72%の大学で「執筆が義務」または「執筆はできる」となっている。

(6)(4)の教職大学院のコースにおいて学位取得のために修士論文以外の執筆物は現在義務づけられていますか。(複数のコースがあり、それぞれで制度が異なる場合は自由記述欄にご回答ください。(例:アのコースとイのコースがある、等))	
ア. 執筆が義務づけられている。	37
イ. 執筆は義務ではないが、執筆はできる。	10
ウ. 執筆は義務ではなく、執筆もできない。	2
エ. わからない(所属でないため等)。	17
課題研究論文を執筆することが全員に義務付けられている。専門学術論文はそれに含まれる。	1
修士(専門職)取得のため、2年間で前期・後期各一回ずつ「ターム・ペーパー」の執筆が義務づけられ、最終的に課題研究報告書」という名称で執筆・提出が義務づけられている。	1
総計	**68**

③報告書等の執筆義務

リサーチペーパー・報告書の規定文字数については、表５のようになっており、20000 字以上の場合が 14 件報告されている。

執筆物の名称については、語尾に「報告書」と付くものが多く、「研究成果報告書」「教育実践成果報告書」「教育実践研究報告書」「課題研究報告書」など、名称は多様である。

表５．規定文字数

0～3000字未満	2
3000字～10000字未満	13
10000字～20000字未満	11
20000字以上	14

④現職教員の割合

教職大学院における現職教員の割合は、最大で 98%、最低で９％であった。平均すると 45.9%であり、概ね半数が現職教員であることがわかる。

（３）「Ⅲ　その他の方向け」調査項目への回答

①その他の方の属性等

その他（教職大学院生及び修了生ではなく、大学の研究職でもない方）の方の属性等を、以下に概観する。

会員は 117 名、非会員は 11 名である。

全国大学国語教育学会の会員ですか？	
はい	117
いいえ	11
総計	**128**

大学院修了生は 63 名である。この中には修士課程院生は含まれていない。

(2)あなたは大学院(教職大学院以外)を修了しましたか。	
はい	63
いいえ	43
総計	**106**

その他の属性は以下の通りである。高等学校教員が 44.1%、小学校教員が 17.2%、中学校教員が 15.1%、で、このうち６割程度が大学院修了生である。また、大学院生は 15.1%である。

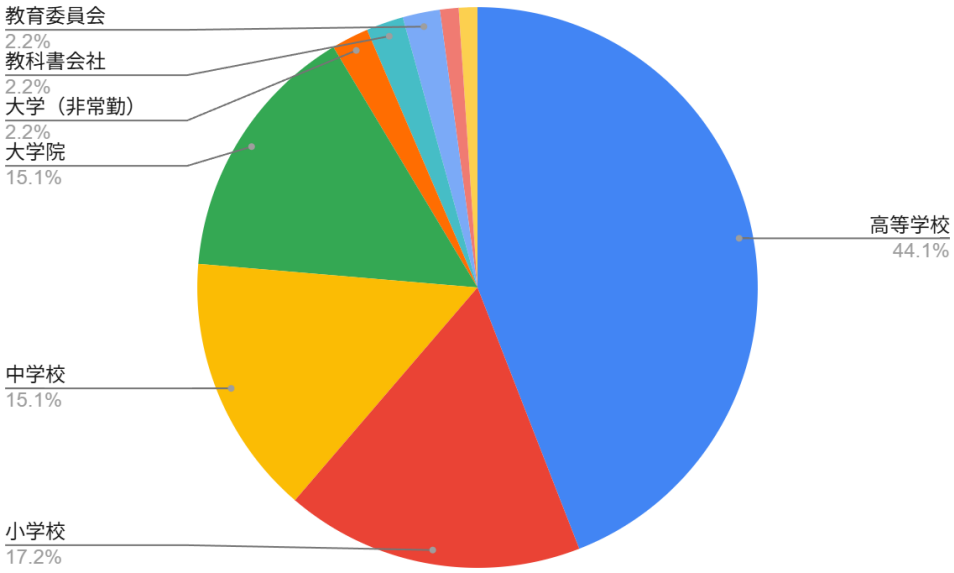

図１．その他の方の属性構成

２．学会に対する意識・要望

（１）集計結果

今回の調査目的である**教職大学院生**の回答を中心に記述していく。

①　全国大学国語教育学会との接点

以下の集計からわかるように、指導教員からの情報提示が一番多いという結果になった。大学院に来るまでは本学会の存在を知らない場合も多いと考えられる。

(1)全国大学国語教育学会をどのようにして知りましたか。	Ⅰ　教職大学院生向け	Ⅲ　その他の方向け
インターネット検索（学会のホームページ等）	1	16
記憶していない。	0	1
協働研究で発表することになったから	0	1
教職大学院の先輩、同級生、後輩等からの情報提示	3	3
教職大学院以外の同僚、知り合い等からの情報提示	2	22
雑誌、書籍	0	6
指導教員からの情報提示	29	76
大学の授業担当教員(大学入学前のオープンキャンパスから知り合っている)	0	1
知人からの紹介	0	1
電子公開されている『国語科教育』の掲載元情報	0	1
総計	**35**	**128**

②　全国大学国語教育学会での発表経験

教職大学院生では、本学会での発表を 16 名（45.7%）が経験している。

(2)全国大学国語教育学会の全国大会で口頭発表（ラウンドテーブル含む）を行ったことがありますか。	Ⅰ　教職大学院生向け	Ⅲ　その他の方向け
はい	16	56
いいえ	19	72
総計	**35**	**128**

③　「国語科教育」への投稿経験

本学会の学会誌「国語科教育」への投稿経験は、研究論文の投稿が２件、実践論文の投稿が２件、資料論文の投稿が１件であり、14.3%が投稿経験者ということになる。

(3)全国大学国語教育学会の研究紀要『国語科教育』への投稿経験を教えてください。(複数回答可)	Ⅰ　教職大学院生向け	Ⅲ　その他の方向け
①研究論文を投稿したことがある。	2	13
①研究論文を投稿したことがある。, ②実践研究論文を投稿したことがある。	0	3
②実践研究論文を投稿したことがある。	2	11
③資料論文を投稿したことがある。	1	2
④投稿したことがない。	30	99
総計	**35**	**128**

④ 他の学会での発表経験

他の学会における発表経験については、35 名中 17 名が発表を経験していることがわかった（48.6%）。また、発表を経験している 17 名のうち、全国大学国語教育学会でも発表をしているのは、9 名である。いずれの学会でも発表経験がないのは 11 名（31.4%）である。

（4）他の学会（学会主催の研究会含む）で発表（ラウンドテーブル、ポスター発表等含む）を行ったことがありますか。	Ⅰ 教職大学院生向け	Ⅲ その他の方向け
はい	17	80
いいえ	18	48
総計	**35**	**128**

表６．学会での発表経験

	（２）全国大学国語教育学会の全国大会で口頭発表（ラウンドテーブル含む）を行ったことがありますか。	*（４）他の学会（学会主催の研究会含む）で発表（ラウンドテーブル、ポスター発表等含む）を行ったことがありますか。*	*全国大学国語教育学会でも他の学会でも発表を行ったことがある。*	*発表を行ったことがない。*
はい	16（45.7%）	17（48.6%）	9（25.7%）	11（31.4%）
いいえ	19	18	26	24

⑤ 他の学会誌への投稿経験

本学会誌以外の学会誌に投稿したことがないと回答したのは 17 名（48.6%）であった。このうち 2 名は「国語科教育」に投稿していることが先の回答からわかっている。したがって、全く学会誌に投稿経験がない院生は 15 名（42.9%）となる。

表７．他の学会の学術雑誌への投稿経験（複数回答可）集計

①研究論文（研究ノート・資料論文等含む）を投稿したことがある。（査読あり）	②研究論文（研究ノート・資料論文等含む）を投稿したことがある。（査読なし）	③実践研究論文を投稿したことがある。（査読あり）	④実践研究論文を投稿したことがある。（査読なし）	⑤実践報告（研究論文扱いではないもの）を投稿したことがある。（査読あり）	⑥実践報告（研究論文扱いではないもの）を投稿したことがある。（査読なし）	⑦投稿したことがない。
8	3	3	5	4	5	17

⑥ 学会参加を薦める可能性

同僚や後輩に本学会・大会への参加を薦めるかという項目に対する回答は、5 以上を選択している割合が 255 名、82.8%であり、ポジティブな理由が多く見られた。

(1)全国大学国語教育学会の全国大会への参加を同僚や後輩等に薦める可能性はどのくらいありますか。	Ⅰ 教職大学院生向け	Ⅱ 大学教員・研究者向け	Ⅲ その他の方向け	総計
10	9	35	11	55
9	2	15	12	29
8	7	27	22	56
7	4	21	18	43
6	1	10	5	16
5	6	17	33	56
4	1	4	6	11
3	1	5	10	16
2	1	4	4	9
1	2	2	2	6
0	1	5	5	11
総計	**35**	**145**	**128**	**308**

⑦ 学会入会を薦める可能性

本学会への入会を薦めるかという項目に対する回答では、5 以上が 237 名、77%と、「参加を薦める可能性」よりは薦める割合が若干下がっている。

(3)全国大学国語教育学会への入会を同僚や後輩等に薦める可能性はどのくらいありますか。	Ⅰ 教職大学院生向け	Ⅱ 大学教員・研究者向け	Ⅲ その他の方向け	総計
10	5	30	4	39
9	0	6	5	11
8	7	30	17	54
7	4	15	16	35
6	2	14	9	25
5	7	27	39	73
4	1	1	8	10
3	2	9	11	22
2	4	5	8	17
1	0	3	5	8
0	3	5	6	14
総計	**35**	**145**	**128**	**308**

（２）学会参加を薦める理由（自由記述）

「（１）全国大学国語教育学会の全国大会への参加を同僚や後輩等に薦める可能性はどのくらいありますか」という質問項目に対する回答の理由（自由記述）について、KJ 法（川喜田二郎『発想法』中央公論社、1967 年）の手続きを参考にして、次の手続きでカテゴリ化を行った。まず 1 名が全回答を類似した内容でカテゴリ化の仮案を作成した。その仮案について残りの３名が独立して妥当性を判断した上で、全員で協議を行い、カテゴリ化の案を確定させた。なお、回答の中に、種類の異なる内容が複数含まれると判断したものについては元の回答の意味が損なわれない範囲で分割した。また、個人が特定される可能性のあると判断した個所は削除した。

本学会の大会参加を薦めるものとしてポジティブな回答については、「多様な視点がある」「最新の情報を知ることができる」「他者との交流がある」「勉強になる」「実践に基づく研究がある」「実践を学術的に裏付けられる」「自分の研究を見直すことができる」「権威がある」「国語科教育を扱っている」「専門性を高められる」「研究が充実している」「助言をもらえる」「研究の刺激を受ける」「内容学を専門とする人が教科教育を学べる」「その他」の 15 のカテゴリが得られた（表８）。**（表中の文言は自由記述回答からの引用のため、句点は原則的に省略。）**

表８．学会参加を薦める理由（ポジティブ）

カテゴリー	教職大学院生の回答	大学教員・研究者の回答	その他の回答
多様な視点がある	自身の研究分野外で自身が学ぶべきことが発見できる	研究発表など色々な知見を学べる場所だからです	「国語」領域のみならず、「言語リテラシー」にも敷衍した発表もあり、参加させていただくと視野が広がる
	多様な視点からの研究に触れることができるため	現場の国語教育の話だけでなく、様々なトピックを有する発表があり、大変参考になります	国語教育研究を行ううえでは、自身の知見が広がり、勉強になるため
	国語科に関わる幅広い分野の理論を学ぶきっかけになるから	国語教育に関する知見を広げ、深めるため	自分の専門分野以外の分野も学ぶことができるため
	色々な研究を知ることができるから	様々な研究者の方々の見解を知ることができる貴重な機会だからです	研究の内容が多岐にわたり、勉強になるため
		多くの知見等を学ぶことができるから	視野を広げるきっかけになるため
		研究の視野や知見を広げる機会であるから	国語科教育に関わる多様な分野の研究の成果を聞くことができるため
		広い視野で研究のあり方を考えてほしいから	幅広く国語教育に関する研究に触れることができるから
		多様な国語科教育研究に触れる機会を得られるため	様々な教育実践や研究の発表がなされ、同僚などの興味関心に合致するものや、刺激を受けるものがありそうだから
		挑戦的な話題を取り上げて毎年がっかいをおこなっているから	
		それぞれの分野での研究を知ることができ、見聞が広がるから	
		国語科教育研究に関わるさまざまな分野の研究発表があるから	
		多くの研究成果を知る機会や傾向を知る機会となるから	
		視野が広がる	
		多様な教育研究・実践に触れられるため	
最新の情報を知ることができる	各領域のトレンドを知ることができる	国語科教育の最新事情を知るため	熱意ある人々に会い、最先端の研究を知ることができるから
	最新の情報や新たな視点が開けることができるから	国語教育学に関する最新の動向を知るため	最新の研究と実践に触れることができるから
	最新の知見を得られ、勉強になるから	国語教育学研究の現在を知ることができるため	研究は続けることに意義があし、新しい情報は必要だと思うから
		国語教育研究に関する最先端の情報を入手できるため	最新の動向を知ることができる
		最新の研究成果を共有できるため	
		最先端の研究を学ぶことができるため	
		常に最新の国語教育の動向を知ることができ、価値観の刷新につながる	
		研究実践の最新傾向を知るため	
		国語教育研究の最新の情報が得られると思うため	
		最新の知見を得られるため	
		最近の研究動向を知るため	
		この分野の最前線の研究をしている学会だから	

他者との交流がある	様々な理論や実践を開発されている人たちとの交流をもつことができるから	大学教員は研究以外の業務で多忙を極め、研究時間を確保するのが難しいが、せめて学会に参加し、他の研究者と情報交換するなど、交流するほうがよいと考えるため	研究の実態を知ることができ、人脈も形成できるため
	自身が抱える悩みを共有し、意見交換できる	対話によって存在の意義がより明らかになり共有できる	コミュニティを広げられるから
	全国的な教職大学院化の影響もあってか、同世代で研究活動に取り組む人は少ない印象を覚える。そのような中で、研究を行う仲間がほしいという思いや、次世代の国語教育研究に対する不安がある。そのため、同世代の方々の学会参加を促したいと考えているから	研究仲間の存在を実感するため	他大学の多くの先生方・院生と交流する機会を得られるため
		研究仲間を増やすため	
		他の研究者とのつながりをもつ場になる	
勉強になる	非常に勉強になる発表が数多くある	企画や研究発表が勉強になるので	学びが多いから
		院生のニーズは多様だが、まずは研究の現場でもある「学会」というものに参加し、体験してほしいと考えるから	大変示唆的で勉強になります
		研究や教育の参考になるため	仕事上、参考になることが多いから
		研究の実際を見られる機会	
		大会自体は面白いし、勉強になる。若い研究者は積極的に参加すべきだと思う。ただし、フィールドが広いので、どの分科会に参加するか絞る必要あり	
実践に基づく研究がある	実践研究が多く、自身の研究だけでなく、現場でも活用できるアイデアが多かったため	学校の現場で指導にあたる教員の実践報告が豊富にあり、学ぶことが多いから	国語科教育についての知見を得る機会だから
		学術と実践の融合したテーマで議論がなされているから	実践に基づく研究発表があるからです
			大学の教員・院生に加え現場教員の参加・発表が活発だから
			様々な分野の研究状況や新たな実践の報告が聞けるため
			特に実務経験がない学生にとって、実践を踏まえた研究や指導技術は大変勉強になる
実践を学術的に裏付けられる	教育現場が向き合っている課題に対して、学術的な提案をしてくれているから	国語教育学に関する理論研究と実践研究の双方の成果を一度に学べるため	公立小学校の教員の中には、理論を蔑ろにし、実践のみを大切と考える方がまだまだ多い。理論と実践を統合した研究に学ぶ必要性を伝えるため
	教職大学院・院生に関しては、実践志向が強く、「研究をしたくて大学院に来たわけじゃない」という人も散見される。ただ、大学院で学ぶ以上、学術・学問に触れるというのは、どんなキャリアを歩むとしても重要だと考えられ、全国大学国語教育学会は国語科教育学としてはその最たるものと考えているため	現職の院生をイメージしたとき、自身の実践を専門的な知見で価値付けてもらえるところが良いと思う	現場実践を研究によって裏打ちする必要性を感じるから
			授業に対する学術的裏付けをアップデートするため
			授業研究に有益な情報が得られるから
自分の研究を見直すことができる		研究の動向や自身の研究を見直す機会になるため	口頭発表をすることで、現在の自分の研究の進捗状況を把握することができるから
		自身の研究を相対化するため	自分の研究を見直すための視点を得る機会となるから
			自分の実践を見直したり、視野を広げるきっかけになるから

			実践ですぐに使えるアイディアや方法が得られる訳でもないが、自身が考えるべきことや扱うべき概念、学ぶべきものを認識・把握することが出来るため
権威がある		国語教育の中で最も権威のある学会の大会であると考えるから	一定程度質の保証された研究を扱いっている印象があるため
		国語教育を専門とする研究者の学会であり、権威があるから	所属会員数の多さ
		最も権威があり最新の研究的な知見を得られる	日本語に関する他の学会よりも、学究的、規模も大きい
国語科教育を扱っている		唯一の国語教育についての総合的な学会だから	
		国語科教育について学べる貴重な場であるから	
		国語教育について学術的に議論できる場として適切	
		国語教育学研究に携わるならここで行われる議論に触れてほしいから	
		大学の担う教師教育でとりわけ国語教育学分野を扱う学会として全国最大規模であり、この分野の教師教育に携わる大学教員はみな所属すべき学会であるから	
		国語教育学の研究を積み重ねてきた歴史があるから	
専門性を高められる	研究に関心が高く、国語教育に対するより専門性を高めたいと思う先生方に進めたい	国語科教育の大学レベルの学会は日本ではここしかないから	国語科授業研究を深めるにあたり、多くの深い研究実践がとても参考になるから
		国語科教育における専門的かつ学術的な知見を得ることができるから	とても深く国語を学びたいと思っている同僚や研究仲間には薦めたいから
研究が充実している		多くの方の研究内容が優れていて、とても大きな学びになっているため	研究や発表の内容が充実していて、大変勉強になるため
		研究発表が充実していたため	
		研究発表や課題研究が充実している	
助言をもらえる	研究の視座や研究方法などの勉強になり、発表時には他の先生方にご意見やご質問をいただけるため		全国規模の学会で知見が養われると考えるため。自分の研究について様々な方々からご指導やご意見をいただくことができるため
研究の刺激を受ける		研究に対する刺激と学びが得られるから	
		研究の刺激を受けるため	
内容学を専門とする人が教科教育を学べる		教科教育に触れてほしい	
		教職大学院化にともない、教科内容（日本文学、日本語学など）の先生方に、教科教育学分野での議論を知っていただくことが有用であると考えるからです。近隣の会場で開催される際にはお声がけしようと考えています	
その他	理論研究は実践研究の基盤となる考え方を取り扱っていると考えるため、教職大学院の後輩へは是非勧めたいと思う	国語教育に関する有益な学会であり民主的かつ公正な研究活動を保障している	公開講座に関しては、無料かつオンラインで、内容も実践寄りのため薦めやすい
	教職大学院では書道教育プログラムであったが、現場では国語科教員として勤務しているため	院生の発表を聞くことのできる場であるから	学会の特性上、全ての現職教員に薦めるのは難しいが、院生など国語科教育研究に携わる全ての人に薦めたいと思う
		所属先が日本語教育現場であるため該当しそうな同僚や後輩はいませんが、国語教育に関係していたり、興味を持っていれば薦めると思うからです	勤務校以外の意欲的な実践について、触れられるから。また、他校種の状況についてもよく知ることができるから
		同僚には、国語教育を研究領域とする人はいないため薦めないが、後輩（研究仲間）には薦めると思うので、８としました	研究理論を知ることができる。研究手法を学ぶことができる。今日では、学会等で、越境する様々な理論を知ることができる

		教職大学院自体は全国大学国語教育学会から遠く隔たってしまっており、強制はできないが、少なくとも自分の指導院生については、研究をガッツリとやってほしいと思っているため	弊社に関係する先生がたが多く所属しているため
		教職大学院の院生の中には、国語科の専修免許の取得を希望する者がいるから	
		分野の独自性が高いので分野間の交流の意義がある（貢献できる）	
		研究者の思いを生で感じる機会になるから	

一方、ネガティブな回答については、「身近に薦める相手がいない」「費用対効果にあわない」「現場に活かしづらい」「専門性が高い」「蛸壺化している」「学会をまだ把握していない」「その他」の7のカテゴリが得られた（表９）。**（表中の文言は自由記述回答からの引用のため、句点は原則的に省略。）**

表９．学会参加を薦める理由（ネガティブ）

カテゴリー	教職大学院生の回答	大学教員・研究者の回答	その他の回答
身近に薦める相手がいない		既に退職したため、薦める相手が近くにいない	周囲に研究的な実践を行っている同僚・後輩が少ない
		国語教育を研究分野とする者にとっては必須の学会だが、自分の身近には国語教育を研究分野とする者がいないから	同僚で国語教育を真剣に行っている人があまりいない
		身近に関係者がいないから	ご自分の課題に真摯に取り組まれている方がいれば、薦めるかもしれません
		すすめるべき同僚はすでに会員で参加しているから	現在、周囲に国語教育に携わっている方がいないため
		そういった関係の人がいないため	国語科教育を専攻している大学院生が所属先にいないため
		勤務校において（知る限り）周囲に該当する人物がいないため	周囲に、国語科を専門に研究している人がいないため
		教育学部ではないために学部には対象となる同僚・後輩がいない。（他学科の該当教員は都合が合えば参加している。）また、教職指導センターの職員は退職校長なので、今さら感がある	
		周囲に関係する人物があまりいない	
		現在非常勤講師として学部授業を担当しているので、教職大学院の学生と接触することがほとんど無い	
		国語や国文の教員同士のネットワークが、私の周辺では薄いので、勧める相手もない	
		国語科教育担当が一人だけである	
		国語教員が私のみ	
		国語教育の研究者ではないから	
		国語を選択しないから	
		大会の内容に興味がありそうな同僚や後輩等には薦める可能性が高いです。一方、職場の状況として、興味のある同僚や後輩等は、既に参加している可能性も高いです	
		本学には、国語教育学担当は一人しかおらず、同僚にすすめるのは難しいところがあります	

		所属していた大学は、国語教育学の研究が求められず、教員採用試験合格対策ばかり求められていたので、国語科教育法以外に国語教育学の授業がなかったから	
費用対効果にあわない	貴重な研究発表の場であるため、自身としても行きたいことに加えて、同僚にも紹介したいのが本心です。 一方で、学校現場の教員目線だと、学会の全国大会への参加費や移動費が自己負担であることや、業務が多忙であること、更に教育現場で主催する国語教育研究会の研究大会の方が何かと経済面や現場でのサポートを得られるため、そちらのほうが参加しやすい現状にあります	情報収集や修学意欲向上のために出席を促しているが、遠隔地開催となると薦めにくい	薦めることを躊躇してしまうほどの多忙感がある
		遠方への移動が必要なため、予算面での負担が大きいから	移動距離が遠い場合は参加しにくいため
		参加費が高いため、強くは薦められない。特に院生には	会費・参加費も高額だと感じる
		興味があれば進めるけれども、参加費が高すぎる。懇親会費も高すぎる	遠方のとき、本当にオンラインにしてほしいから。内容は聞きたいのに行けないから
		研究をしてきた身としては現役教員にも学会を知ってほしい。ただ、日々の忙しさの中で大会への参加は難しく、会費も高いことから、容易にはすすめられない	開催地が遠方のことが多いので
		役に立つならお薦めするが、他の予定と重なったりした場合には、無理をしなくてよいと思ったから	
		院生を含む後輩には薦めることはあると思いますが、とくに院生にすすめる場合、開催場所によってその判断は変わると思います	現在の勤務校では学会が校務と重なることが多く、参加が難しいため
		費用や時間のコストを考え（3）よりやや低め	日常の仕事をこなすのが大変
			オンライン・オンデマンドが一部のみで、部活動や休日出勤のある現場教員からすると参加しずらいため
			学会参加は交通費や宿泊費等々費用がかかることなので
			距離の遠さによる
			交通インフラの不便な場所から遠方の学会への参加にはハードルが高いから
現場に活かしづらい	同期の現職院生や職場の同僚は、自身は実践者であって研究者ではないという意識が強く、学術研究に対する関心自体が薄いと感じたため、勧めようとは思わない		有意義だが、実践者に薦めるには向き不向きがあると考えているため
	大学の先生がメインで現場の実践にすぐ生かしにくいため、同僚の小学校教諭にはすすめにくい		現場の教員の意識とは離れているように感じるから。また、研究を毛嫌いする雰囲気が現場にはあるので
			学会誌の掲載内容が、勤務校の指導内容・実態に合わないから
			周囲の同僚は研究に関心がないから
			同僚の教員は研究に対する関心が低いため
			周りの教員が、このような取り組みに興味がなさそうなため
			現場の教員の意見です。教育系の大学院まで進学していない方にとっては敷が高く感じられるようです。また、議論についても現場の感覚とは一線を画

			する部分があるため、参加する意義を感じられないようです
			現場にいると、現実的に参加が難しく、また、内容も実践と距離のあるものが多いから
			学会参加以外にも教職員としての自己研鑽の方法は多いから
			進学校ではない現在の職場では教科指導以上に生徒指導、進路指導に比重が置かれているから
			40 年間高校現場で実践を積み、学会にも参加、発表もしてきたが、これからの国語教育、特に実践を考える後輩に対しては、あまり薦める魅力を感じない
専門性が高い	国語教育の学会としてはとても専門性と敷居が高く、参加者の技量を選ぶ性質があるため	中堅以上の研究者と若手研究者による大会という印象が強く、中高年の新人実務家教員にとっては参加のハードルが高いため	JTSJ は理論色が強いため、同僚（現場の教員）のすべてに薦めるのがよいとは思わない
	とても学びが深いため。しかし、一般教諭には難しい内容も多いため 8 とした		理論的な発表（授業実践がない、抽象的な概念な多く登場する研究）も多く、大学の後輩が参加した場合に理解が難しい部分があると感じた
			実戦よりも学術的研究に重きをおいた学会というイメージが強いため、現職の教員向きでない印象をもたれやすい
			実践家にはややハードルが高い
			専門性が高く、薦めたい人が今はいない
			授業技術を身に付けることには興味がある人が多いが、専門知識は必要としていないので薦めにくい
			①国語に専門性・興味をもっている同僚が、いないから。②①のような職場において、全国大学はレベルが高いと感じるから（アカデミックだから）
蛸壺化している		固定化されていることと、教科教育に特化しすぎている。時代の変化もあり同じメンバーで回している同人のような感覚はある	
		会場が分かれ、各会場にいる人が定まってしまうからです（説明文なら説明文の人ばかり、文学なら文学の人ばかり、のように）。最初の数回程度の発表や参加なら、専門的な知見から意見が聞けてありがたいですが、ある程度発表回数を重ねると、ややマンネリ化してしまうように感じます。それ故、行ったことがない人や数回しか参加したことがない人には「一回参加してみたら」と勧めることはあります	
		教科横断的な学びやマルチモーダルな学びが推奨される時流において、国語（特に言葉）に特化した学会は薦めにくい（言葉の否定ではなく、魅力のプレゼンが難しいということ）	
学会をまだ把握していない	自分がまだ参加したことがないため		入会したばかりで学会のことをよくわからない
その他	「国語教育学」と「して、現場に役立つ発表はとても有意義に感じる反面、「国語教育」というよりは「文学研究」「国語学研究」「国語史研究」の色が濃い発表は他の学会でも拝聴する機会が持てるものと感じております	教職大学院においては「研究」が失われつつある傾向にあると考えるから	大変学びが多い一方、関心が高くないと足を向けづらいから

		アカデミックな内容に対する関心や既有の知識の有無に差があるため	価値観や意識の違いがあるからです
		同僚、後輩については特に勧誘の必要はないから	大学での勤務を希望するならば薦める
		同僚や後輩等が国語教育に興味を持っているかどうかの確認が必要であるため	本当に参加してよかったと思えることが少ないから
		教育学的な前提が共有されておらず、発表内容に興味を持てない場合が多い	そこまで重要性を感じていないため
		国語教育に興味をもたれた同僚に発表題目を見せたことがあるが、近年の学会の発表は、実践報告的なものが多く国語教育に関する理論的な面を知りたいと思う同僚のニーズに合わなかったことがある。実践報告レベルであれば勤務校近隣の実践そのものを見に行くことを望まれたため、同僚には薦めることができなかった	参加し、勉強するという意味では、多くの部会や多様な研究があり意味があると思うが、研究業績を獲得したい目的での参加である場合、特に論文投稿はかなりハードルが高いと思われるため、他の学会での発表と比べて悩んでいるならば他の学会を勧める可能性が高いため
			学会対面参加の最も大きな意義は参加者間の交流にあると考えるが、面識のない者同士で交流を深められる人は非常に限られるから

（３）学会入会を薦める理由（自由記述）

「（３）全国大学国語教育学会への入会を同僚や後輩等に薦める可能性はどのくらいありますか」という質問項目に対する回答の理由（自由記述）についても、前節と同様の手続きでカテゴリ化を行った。なお、「前の理由と同じ」のように前の質問項目に対する回答と同様であるとだけ述べてあるものは含んでいない。

この結果、本学会への入会を薦めるものとしてポジティブな回答については、「権威がある」「勉強になる」「研究動向を知れる」「研究への意欲が高まる」「発表ができる」「研究の視座が得られる」「研究の質が高い」「知の共有を図れる」「学会誌が届く」「学術的」「国語教育を幅広く扱っている」「実践に活かせる」「キャリアアップにつながる」「研究の基礎が学べる」「研究仲間ができる」「その他」の 16 のカテゴリが得られた（表１０）。**（表中の文言は自由記述回答からの引用のため、句点は原則的に省略。）**

表１０．学会入会を薦める理由（ポジティブ）

カテゴリー	教職大学院生の回答	大学教員・研究者の回答	その他の回答
権威がある		国語教育の中で最も権威のある学会であると考えるから	
		国語科教育の最もステータスの高い学会であるから	
		国語科教育研究に携わる方々が最も多く所属している学会だから	
		国語教育を研究する上では避けて通れない学会だからです	
		国語教育研究に関心があるのであれば、所属は必須の学会だと思われるため	
		大学の担う教師教育でとりわけ国語教育学分野を扱う学会として全国最大規模であり、この分野の教師教育に携わる大学教員はみな所属すべき学会であるから	
		国語教育を研究分野とする者なら必須の学会だと考えるから	

勉強になる		企画や研究発表が勉強になるので	学会での口頭発表を聞いたり、学会誌を読むことは大変勉強になるためお勧めはしたいと思う
			本学会から多くの知見をいただいており、学びの機会になると実感しているため
			会費はかかるが、論文など勉強にはなるため
			仕事上、参考になることが多く、刺激を受けることに繋がるから
			勤務校以外に学びの場があるのはとても大切なことだと思うから
研究動向を知れる	日本国内の国語教育に関する研究の動向や現状を知られる貴重な場であると感じます	この分野の最前線の研究をしている学会だから	国語教育研究の動向が掴めるから
		たくさんの実践、研究に触れられることと最新の動向を知ることができるから	国語科教育にかぎっていえば最大規模、最新の情報が得られるから
		現場経験を活かす実務家教員ではあるが、大学院（教職大学院を含む）に進学する学生も教えており、国語科教育学に関する情報、研究の最先端に触れる貴重な機会を得るため	
研究への意欲が高まる	研究意識や向学心を持ちながら実践にあたることができるため	学びたい意欲、研究を発信したい意欲に満ちている同僚、後輩にはぴったりの学会だと思うからです	大会での発表が研究のモチベーションになるから
		論文などが届くなど入会することで研究意識などが高まるからです	
		対話によりお互いの理解と意識を高め合える	
発表ができる	発表もできるし、入会すればより研究を進めることができるから	研究・発表などの場として貴重であるから	大学院生ならば、論文を必ず書くので、意見をもらう場が必要だと思うから
		入会し、研究成果を発表してほしいため	
		学会発表することができ、会員から多くの有益な指導を得られるから	
研究の視座が得られる	新たな視点を得られて自身の研究や実践に繋がる機会になっています	過去の研究成果を把握し、今後の展望をもつため	国語科授業研究を深める上で、多くの深い研究にふれることができ、自分の研究を深めることにもつながるからです。マイナス 1 は、研究への意欲がない方にはおすすめしないからです
		研究において、示唆される事が多い。が、最終は、自分の判断なので 8 にしました	
研究の質が高い		多くの方の研究内容が優れていて、とても大きな学びになっているため	(2)の理由と重なるが、具体的に言うと学会誌や要旨集が優れているから
		研究の質の高さ	学会誌のレベルも非常に高く、現場にいては勉強できないことも多いため
知の共有を図れる		現在、国語教育の知見の共有を図ることができる代表的な組織であるため	
		国語教育学研究の現在を知り、自身の研究を会員と共有することができるため	
		多様な国語科教育研究に触れる機会や学会誌を通した交流が可能になるため	
学会誌が届く			学会に参加したり学会誌をいただくことができるため
			学会誌が届くから
			『国語科教育』の送付、会員の発表権が魅力的だから
学術的	学術的な提案は、教育現場に学術的な根拠をもたらしてくれるから	アカデミックであるから	

国語教育を幅広く扱っている		国語教育において、最も射程範囲の広い学会であるから	幅広く国語教育に関する研究に触れることができるから
実践に活かせる		教科教育、授業実践の達人になってほしいし、宮崎県の国語教育を盛り上げて欲しいから	実践に基づく研究発表があるから、発表を聴いたり、自身が発表することで、現場に役立つからです
キャリアアップにつながる		上記に加え、キャリアアップのチャンスの場となるため	
		学会の規模から、国語教育分野で業績を披露・蓄積して知名度を獲得するうえでもっとも効果的だと考えるため	
研究の基礎が学べる		研究の基礎や方向性を学ぶため	学会で学んで力量をつけて欲しいから
研究仲間ができる	全国的な教職大学院化の影響もあってか、同世代で研究活動に取り組む人は少ない印象を覚える。そのような中で、研究を行う仲間がほしいという思いや、次世代の国語教育研究に対する不安がある。そのため、同世代の方々の学会参加を促したいと考えているから	研究の交流と研究仲間の形成に有益である	
その他		同僚は上記と同様の理由です。院生を含む後輩については、研究を進めるのに悩んでいる現場教員や本格的な研究に進みたい院生に対して進めることはあり得ます	所属していた方が案内などを受け取りやすく、機会が増えるため
		学会の内容に興味がありそうな同僚や後輩等には薦める可能性が高いです	
		学会への関心を高めてもらうため	
		分野の独自性が高いので分野間の交流の意義がある（貢献できる）	
		教職大学院の院生の中には、国語科の専修免許の取得を希望する者がいるから	
		今後研究を続けるとなれば薦める	

一方、ネガティブな回答については、「周囲に関係しそうな人がいない」「金銭的ゆとりがない」「現場と乖離している」「興味関心にあうかわからない」「時間的ゆとりがない」「査読が厳しい」「研究対象が狭い」「非会員でも十分」「自分自身が学会のことを把握していない」「その他」の 10 のカテゴリが得られた（表１１）。**（表中の文言は自由記述回答からの引用のため、句点は原則的に省略。）**

表１１．学会入会を薦める理由（ネガティブ）

カテゴリー	教職大学院生の回答	大学教員・研究者の回答	その他の回答
周囲に関係しそうな人がいない		周りに若い方がおらず、接することがすくないため	周りの国語教育に関心がある方はすでに入会をしています
		国語科の教員が少なくなった	有意義だが、実践者に薦めるには向き不向きがあると考えているため
		国語教育とは限らない	周りに国語教育を研究している方がいないため
		職場の状況として、興味のある同僚や後輩等は、既に学会に入会してる可能性も高いです	①国語に専門性・興味をもっている同僚が、いないから ②①のような職場において、全国大学はレベルが高いと感じるから（アカデミックだから）
		すすめるべき同僚はすでに会員だから	周りの教員が、このような取り組みに興味がなさそうなため

		勤務校において（知る限り）周囲に該当する人物がいないため	薦めるようと思う相手は既に大学・大学院までで入会している可能性が高く、それ以外の相手には薦めづらい
		国語を選択しないから	同僚の教員は研究に対する関心が低いため
		そもそも身近に対象となる同僚・後輩がいない。中学校に勤務していた時は有能な後輩に今後の可能性として示したことがある	現状では、同僚や後輩がいないので
		国語教育の研究者ではないから	
		同僚には、国語教育を研究領域とする人はいないため薦めないが、後輩（研究仲間）では、すでに入会している人がほとんどなので２としました	
		研究を志向する人間が少ないため	
		周囲に関係する人物があまりいない	
		現在非常勤講師として学部授業を担当しているので、教職大学院の学生と接触することがほとんど無い	
		(2)に加え、私の後任者は国語教育学の研究者ではなく、学士で、行政職や学校管理職の経験しかないうえ、そろそろ還暦なので、これから新たに国語教育学の研究を始めるとは思えないため	
		国語科教育が専門の同僚や後輩はすでに入会済みであるから	
		国語教員が私のみ	
		身近に関係者がいないから	
金銭的ゆとりがない	参加費が高いし、会場が地方で遠いと学生には難しい部分があるかもしれません	内容的には（２）で答えたとおり薦めたいが、誰もが躊躇なく年会費を支払えるとは限らないから	自大学の学会は学生のみ会費免除であるため入会しやすいが、本学会は会費がかかるため少しお勧めしづらいと感じる
	学部卒生で補助が出ない場合は入会金が少し高い	費用負担があるため、強くは勧めにくい（個人の判断によるため）	会費がかかるので
		参加費が高額なため	必要なこととは言いつつそれなりの金銭的な負担はあるので、積極的に勧められるかは難しいと思います
		年会費や参加費が高いため、強くは薦められない。特に院生には	学びが多い学会であるが、お金がかかるものなので勧めづらいから
			大会参加費が安くなる、紙媒体の『国語科教育』が届く等のメリットがある一方で、年会費がかかるため、入るかどうかはその人が最終的に判断することだと考えている。 そのため、学会に入会することのメリットは説明するが、入会を（強く）薦めることはしないだろうと思われるため
			お金と時間がかかることだから
			会費の額がやはり薦めるには厳しいかなと思うので。払う分には妥当な額と思ってはいますが
			大会に参加し、勉強することが目的であるならば、年会費を払ってまで参加する必要性がそこまで高くないと考えるため（入会の意思を止めることはない）
			年会費を個人が払う中高教員としては会費が高い。また実践研究をするかどうかは本人の意志の問題であるため、まずは大会に参加することがよいと思うため
現場と乖離している	現場の教員の目線だと理論的な研究が現場の実態と乖離していたり、研究の現状に対して閉塞感を感じることも否めません。	基本は勧めるけど研究より実践がメインの人だったらここじゃないかもしれないから	必ずしも現場の教員のニーズ（実践方法や教材研究）に直接応えているとはいえない。また、会費・参加費が高額

	他の学問分野との連携をより行うなどのさらなる進化があれば、後輩や同僚の先生方に紹介しやすくなると思います		である。同僚に薦めるのであれば、『月刊国語教育』の購読を優先する
	自由研究発表について、発表会場や発表された実践によるのだろうが、児童生徒につける力や評価について言及されない或いはそこに重きを置いていないものが多く、現場での実践にいきない研究であると感じたから	学部生には内容的にハードルが高く、実践をしている現場の先生にはテーマや発表内容が現場の悩みとやや乖離している傾向が強い	理論に関心がある人にとっては大変有意義である。一方で、理論研究の多くは、実践の中にある理論とは、だいぶ距離感を感じることがある
			現場の実践と距離がある
			知り合いは義務教育の教員が多いので、実践中心の学会の方が勧めやすい
			学会誌の掲載内容が、勤務校の指導内容・実態に合わないから
			研究者を目指すにはいいかもしれないが、どうも現場の声をきちんと聴いて研究に反映させていく意識が弱い学会のように思われる
			現場の教員の意見です。現場の教員としては全国大学国語教育学会の取り組みや成果が直接現場につながっている感じが無いため、無理してまで入会を促す意味が感じられない
			（2）と同様に、理論よりも実践ですぐに使えるものを必要としている人が多く、専門性を求めていないから薦めにくい
			研究者を目指さずに現場教員として働くつもりならあまり必要性を感じないから
興味関心にあうかわからない		その人が研究したい国語の興味関心と一致しているかどうかによる	そこまで熱心に取り組む同僚が多くないから
		それぞれの興味関心があるため、紹介はすることはできるが、入会は本人の意思によるところが大きいため	価値観や意識の違いがあるからです
		ニーズについては人それぞれだと考えるため	
		国語教育に興味あれば。ないとここにこだわる理由は少ない	
		専門や興味の如何による	
		本人の意志だから	
		同僚や後輩等が国語教育に興味を持って、学会活動に参加したいかどうかの確認が必要であるため	
時間的ゆとりがない	学会参加にあたって前泊が必要となる地方で 教員として勤務していると、全国大会に参加することは春秋ともに難しく、年会費に見合うだけのメリットを同僚や後輩には説明しにくい	ストレートマスターの院生にはなるべく参加するように呼びかけてはいるが、現職を続けながらの院生にはゆとりがないようで強くは進められない	継続的参加が難しい人もいるので
		大会参加は非常に有意義だが、現場教員だと離れた会場への参加は難しいことも多いと考えられるため	大学の後輩であれば、まずは学会大会に参加し、発表等を見てから入会を決める必要があると感じる。同期は教員１年目であり、実態を聞いたところ、学会大会への参加も難しく、多忙を極めていると聞いた。まずは参加してみてから入会を検討することが適切だと感じた
		役に立つならお薦めするが、他の予定と重なったりした場合には、無理をしなくてよいと思ったから	日常の仕事をこなすのが大変で余裕がない
		研究をしてきた身としては現役教員にも学会を知ってほしい。ただ、日々の忙し	

		さの中で大会への参加は難しく、会費も高いことから、容易にはすすめられない	
査読が厳しい		学会誌の査読が厳しいから	口頭発表等は勉強になるが、学会誌の投稿論文の採択率については1割に満たない状況にあるから
		研究のレベルは高いと思うが、『国語科教育』に投稿する論文の修正依頼がかなり細かくそのチェックも厳しい。想像以上に時間を取られてしまう。業績を積みたい若手には向かない	論文を投稿し、査読後不採用となったのち、再投稿前にご指導をいただけるとありがたい
		査読が理不尽	
研究対象が狭い		教科横断的な学びやマルチモーダルな学びが推奨される時流において、国語（特に言葉）に特化した学会は薦めにくい（言葉の否定ではなく、魅力のプレゼンが難しいということ）	教育学部以外の学部卒の人には、学会誌のハードルが高く、利益を得ている感覚が少なく費用対効果が薄く感じられるのではと思っているため
		教科教育学のポストの在籍者が自分１人であり、他は教科内容領域（日本文学、日本語学など）の教員です。教科内容領域の先生方は特別な理由がなければ国語教育学には関心を保ちませんし、それが「学」として成り立つということに懐疑的であると感じています。また、本学会の機関誌における採択率は非常に低く、誰もが「国語科教育」の関心の中心にあると認めるようなテーマでないと掲載の見込みがありません。そのため、文学や日本語学など他分野の先生方が、学会に参加したときに機関誌への投稿をおすすめできるような状況にもありません	
		本学会機関誌における「実践論文」の枠の狭さを考えると、なかなか入会をおすすめできません	
非会員でも十分		会員でなくても参加できるため	発表や投稿をしないのであれば、非会員でもよいと思うから
			自分が入会していないのに、同僚に薦める可能性は低いから
自分自身が学会のことを把握していない	私自身がまだ会員ではないため		私自身が周りの方にお薦めさせて頂けるほど、会のことを理解できていないから
			自分がまだよく把握できてない(ママ)
その他	自分が積極的に参加できていない	教職大学院生も研究の刺激を受けるべきだが、現状からは、無理強いはできない	研究機関に所属していません。賛助団体のような形式で会員になれるのであれば、申請させてください
	学会の価値は感じているが、学会誌等入会していないと得られないものにそこまで価値を感じていないから	（２）で述べたように教職大学院の院生のニーズは多様で、全員が研究を志望しているわけではないので、相手に応じて薦めていく感じになる	自分自身がそこまで満足していないから
	全国大学国語教育学会において、教職大学院を修了して現職教員となった自分が疎外感を感じていることも事実である。疎外感を感じた場面の一例が、本アンケートにおいて、「修士論文（リサーチペーパー、研究課題報告書等を除く）」という表現について、自分自身が執筆した実践論文は「修士論文」か「リサーチペーパー、研究課題報告書」なのか、判断に迷ったことである。出身校の実践論文は、専門職修士の学位を得るために必須であり、論文の体裁を取ってはいるものの、実質的にはリサーチペーパー、研究課題	実践報告論文で「倫理審査番号」を記載していない論文が多い。他の教育関係の学会では生徒や学生を対象とした実践の論文執筆の際には必ず所属する機関の倫理審査を受けて、論文には「倫理審査番号」を記載するのは常識となっている。早急に検討していただきたい	入会は個人の判断だと思うから

	報告書に近いものもあり、「修士論文」と呼べるような質が担保されているとは思えない。そうした実情は考えないとしても、修士相当の学位が与えられるが修士の学位は得られない専門職大学院で「修士論文」が書かれることはないのではないかと、違和感を覚えた。 自分は居住地等の事情により教職大学院への進学を選んだものの、実践研究より理論研究に関心があるため、全国大学国語教育学会にのみ所属している。一方で、全国大学国語教育学会において、自分のように教員養成課程から教職大学院に進み、国語科教育学の理論研究のバックグラウンドが薄い人間は、そもそも議論の一員として想定されていないと感じるため、他者、特に同僚に、学会への参加を積極的に勧めることは難しいと感じる		
		学会への加入は個人の意思であるから	学会発表はハードルが高いと思われるため
		アカデミックな内容に対する関心や既有の知識の有無に差があるため	

（４）刊行物等に関する希望

・学会に今後希望する刊行物等について、以下の項目から選択して回答していただいた（複数回答可）。

①国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレットの刊行
②国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレットの刊行
③研究論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行
④実践論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行
⑤学会誌での実践報告の掲載
⑥地方大会・地域研究会の創設
⑦研究や実践に関する助成金の創設
⑧新たな学会賞の創設
⑨特になし
その他

回答総数は 308 であり、回答項目ごとの集計とその内訳は、表１２のようになっている。表中の①～⑨は上記項目と対応している。

表１２．学会に今後希望する刊行物

回答項目	教職大学院生	大学教員・研究者	その他の方	合計
回答数	35	145	128	308
①	25	95	79	199
②	21	85	93	199
③	15	60	45	120
④	18	67	52	137
⑤	9	48	41	98
⑥	10	28	32	70
⑦	10	34	26	70
⑧	2	11	20	33
⑨	1	12	6	19
その他	4	12	6	22

表１２からもわかるように、今後学会に希望する刊行物は、①「国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレット」と②「国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレット」が、「教職大学院生」、「大学教員・研究者」、「その他の方」全ての総計において圧倒的に多いことがわかった。また、「教職大学院生」に焦点化してみた場合でも、この①と②の刊行物への要望は、①が７割以上、②が６割と１位２位を占めている。

「教職大学院生」に関する上記項目についての複数回答の集計は、表１３の通りである。表中の番号は、上記項目番号と対応している。

表１３．教職大学院生の要望

学会に今後希望する刊行物等の回答パターン	回答数
①	1
①②	4
①②③④	2
①②③④⑤⑥	1
①②③④⑤⑥⑦	1
①②③④⑤⑦	1
①②③④⑥⑦⑧	1
①②③④⑦	2
①②③④⑦⑧	1
①②④	1
①②④⑤⑥	1
①②⑤⑥	1
①②⑤⑥⑦	1

①③	1
①③④⑥,その他(a)	1
①③④⑦	1
①④	1
①⑤,その他(b)	1
①⑥	1
①⑥⑦,その他(c)	1
②	1
②③④	1
②⑤	1
②⑦	1
③④	2
④	1
⑤⑥	1
⑨	1
その他(d)	1
合計	35

※表中の「その他」の回答を、以下に記載して示す。

(a)会員向け交流サービスやホームページの機能などの充実

(b)全国大会における、対面・オンラインのハイブリット開催

(c)過去の国語科研究の配布。過去の成果と展望の再販

(d)査読時にそのテーマを専門とする査読者が付くこと

上でも述べたように、教職大学院生の中で学会に対する刊行物に対する希望が一番多かったのは、①の「国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレットの刊行」で 71.4%、2 番目に多かったのは②の「②国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレットの刊行」で 60.0%、3 番目は④の「実践論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」51.4%であった。これらのことから、少ない総回答数からではあるが、教職大学院生の半数近くが、今後学会の刊行物に対しては、理論研究や実践研究、実践報告をまとめた書籍やブックレットの刊行を希望しているとみることができる。

また、3 番目に多かった④「実践論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」と、4 番目に多かった③の「研究論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」とを合わせて捉えると、共に教職大学院生が研究論文や実践論文の書き方を学ぶ書籍やブックレットの刊行を望んでいることが確認できる。特にこの論文の書き方に関しては、わずかな差ではあるが研究論文よりも実践論文の書き方に関心をもっていることがわかる。このことは、⑤の「学会誌での実践報告の掲載」を希望した者が 25.7%いたことと合わせて考えると、教職大学院生の中には（3 割程度が）実践論文の書き方を学び、それを学会誌に投稿・掲載されることを目指している者がいると捉えることができる。さらに、28.5%と３割弱ではあるが、⑥「地方大会・地域研究会の創設」を希望している者、25.7%ではあるが⑦「研究や実践に関する助成金の創設」を希望する者がいることがわかる。

次に、各項目の組み合わせでみてみると、圧倒的に多いのは①の「国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレットの刊行」、②の「②国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレットの刊行」、③の「研究論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」と④の「実践論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」の 4 項目全てが選択された組み合わせで、インプットとアウトプット、理論と実践を結び付けて学ぼうとする姿を捉えることができる。

【大学教員・研究者】

次に大学教員・研究者の回答をみていく。表１４の項目番号は、上記の①～⑨と同じである。

表１４．大学教員・研究者の要望

学会に今後希望する刊行物等の回答パターン	回答数
①	5
①②	11
①②③	1
①②③④	13
①②③④⑤	8
①②③④⑤,その他(e)	1
①②③④⑤⑥	4
①②③④⑤⑥⑦	2
①②③④⑤⑥⑦⑧	4
①②③④⑤⑦	2
①②③④⑤⑦⑧	1
①②③④⑥⑦	1
①②③④⑦	2
①②③④⑦⑧	1
①②③④,その他(f)	1
①②③⑤	1
①②④	2
①②④⑤	1
①②④,その他(g)	1
①②⑤	6
①②⑤⑦	2
①②⑤,その他(h)	1
①②⑥	1
①②⑥⑦	3
①②⑦	2

①②⑦⑧	1
①③	1
①③④	4
①③④⑦	1
①③⑤	1
①③⑥⑦⑧	1
①③⑧	1
①④	2
①⑤⑨	1
①⑥	2
①⑦	2
①⑦,その他(i)	1
②	1
②③⑤	1
②④	3
②④⑤	1
②④⑤⑥⑦	1
②④⑤⑦	1
②④⑥	1
②⑤⑥	1
②⑤⑦	1
②⑦	1
③④	5
③④⑤⑥	1
③④⑥	1
③⑥⑦	1
④	1
④⑤	1
⑤	5
⑥	2
⑥⑦	2
⑦	1
⑧	1
⑧,その他(j)	1
⑨	10
⑨,その他(k)	1

その他(l)	1
その他(m)	1
その他(n)	1
その他(o)	1
その他(p)	1
合計	145

※その他の回答は表外に記載。
以下の(e)～(p)は、回答文をそのまま記載。

(e) (1)機関誌掲載の研究論文・実践論文として採択される論文等の枠を拡張し、国語（科）教育学そのものの幅の広さを機関誌そのものが示していくようになること。これは同時に、機関誌の採択率を上げていくことになると思います。
海外ジャーナルの一流誌の基準＝10%ではなく、一般ジャーナルの基準＝50%を目指し、会員間の研究発信・相互交流のための機関誌という位置付けを確かなものにしていったほうがよいのではないかと思います。
(2)ポスター発表等、実践のみを行う若手や院生がより気軽に発表できる大会発表枠の設定（昨今、発表締切前に上限数に達し応募できなくなるという状況も多いようですので、そもそも口頭発表だけ、という状況が難しいのではないかと思います）。
(3)研究方法や論文の書き方に関する公開セミナーの開催。
(4)公募型の課題解決グループや SIG の設置。
(f) 研究の裾野を広げるため、全国大会をオンライン併用開催とすること。
(g) SIG（Special Interest Group）のような関心を共有するグループが集まる機会、連絡をとり続けるシステム（若手交 流の拡大・継続版のような）。
(h) 資格課程における教育内容を現状に合わせるために、教育現場での少子化に伴う対応の変化や、ICT 活用による教育方法の変化などを知りたい。
(i) ICT の導入は少しずつでも必要と考えます。
(j) ①専門の査読者が審査にあたること、②「修正再審査」になった場合のやりとりを丁寧にすること。
(k) 若手にむけた論文賞を使って欲しい。
(l) 国語科教育として、時代とは言え、古典や漢文の扱いがあまりにおろそかである。生活に役に立つ文章だけが生き残るのだろうか。その問題意識を、共有して、むしろ学会から発信していくことも大事なのではないか。
(m) 教育学は最低限として、文学や言語学、歴史学等の関連学問を学ぶことの意義と必要性に関する提言。
(n) 参加費の減額（会費を払っていると、参加費のないところもある）、査読回数を増やす。
(o) 中高生を対象にしたコンテストやイベントの実施。
(p) 統計のワークショップ、質的研究の方法論（コーディング等）のワークショップ。

上記の集計から、大学教員・研究者を各項目の組み合わせでみると、一番多いのは①の「国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレットの刊行」と②の「②国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレットの刊行」の組み合わせで 50.3%である。また、前述の大学院生の場合と同様に、これらに③の「研究論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」と④の「実践論文の書き

方に関する書籍・ブックレットの刊行」の組み合わせを加えた 4 項目への希望は 35.9%であった。ここから、大学教員や研究者も理論的な研究と実践的研究双方への目配りと往還の重要性を意識していることがうかがえる。さらに、指導する側からもインプットとアウトプット双方を確認し新たな知見を学ぼうとする姿を捉えることができる。

この他には、上記の院生の場合と同様に⑥「地方大会・地域研究会の創設」と⑦「研究や実践に関する助成金の創設」の希望が 9.0%であった。

【その他の方】

次にその他の方の回答をみていく。項目番号は、上記の①～⑨と同じである。

表１５．その他の方の要望

学会に今後希望する刊行物等の回答パターン	回答数
①	2
①②	20
①②③④	9
①②③④⑤	4
①②③④⑤⑥⑦	1
①②③④⑤⑥⑦⑧	2
①②③④⑤⑥⑧	1
①②③④⑤⑥,その他(q)	1
①②③④⑤⑦⑧	1
①②③④⑤⑧	3
①②③④⑥	2
①②③④⑦	2
①②③④⑦⑧	1
①②③④⑧	1
①②③⑥⑦	1
①②③⑦	1
①②④	2
①②④⑤⑥	1
①②④⑤⑥⑦⑧	1
①②④⑥	1
①②⑤	5
①②⑤⑥	3
①②⑤⑥⑦⑧	2
①②⑥	3

①②⑦	3
①②⑧	1
①③④⑥⑦	1
①③④⑥⑦⑧	1
①③⑤	1
①③⑥⑧	1
①⑥	1
②	4
②③④	2
②③④⑤	1
②④	2
②④⑤⑥	1
②④⑤⑦	1
②④⑥	1
②④⑥,その他(r)	1
②④⑦	1
②⑤	2
②⑤⑥	2
②⑤⑦	1
②⑥	1
②⑥⑦	1
③	4
③④	1
③④⑤	1
③④⑤⑥	1
③④⑧	1
④	2
④⑧,その他(s)	1
⑤	3
⑤⑥⑦	1
⑤⑦⑧	1
⑦	1
⑦⑧	2
⑨	6
その他(t)	1
その他(u)	1

その他(v)	1
合計	128

※その他の回答は表外に記載。

その他の回答を、以下に原文のまま示す。

(q) 研究者と実践者の共同研究の橋渡し的な取組
(r) オンライン・オンデマンドにて、現場の先生が困った際に気軽に情報が得られるツール的な役割も必要だと考える。
(s) 査読のご負担になってしまうかもしれませんが、投稿論文のページ数を 10 ページにしていただけると幸いです。質的研究として生徒のこと（エピソード等）をしっかり入れたいため。
(t) まだよくわからない。
(u) 情報科学研究、文学研究、心理学研究、哲学研究などの他領域との接点をまとめた書籍・ブックレットの刊行。
(v) 地域を分けて学ぶ機会があるとありがたい。

上記の集計から、「その他の方向け」の回答では、①の「国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレットの刊行」と②の「②国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレットの刊行」の組み合わせが 15.6%と最も多く、次が①の「国語科教育に関する理論研究をまとめた書籍・ブックレットの刊行」、②の「②国語科教育に関する実践研究や実践報告をまとめた書籍・ブックレットの刊行」、③の「研究論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」と④の「実践論文の書き方に関する書籍・ブックレットの刊行」の 4 項目全てが選択された組み合わせで、14%であった。

「その他の方向け」からの回答では、上掲の表内左欄からもわかる通り、希望する項目間の組み合わせの回答パターンが 35 通りと多様であった。また、そこに具体的な希望内容をさらに詳細に記述してくださった回答も多くみられ、その幾例かを挙げると、海外ジャーナルとの関係や「SIG（Special Interest Group）のような関心を共有するグループが集まる機会」への希望、「少子化に伴う対応の変化や、ICT 活用による教育方法の変化」を学ぶ機会への希望が記述されており、今後に向けた前向きな提案を含む意見を垣間見ることができる。

（５）企画に対する希望

全国大学国語教育学会に関する企画の希望については、①②③④⑤⑥⑦その他を複数回答可で回答してもらった。

①ポスター発表
②情報交換会（大学院生・教職大学院生の交流会等）
③研究論文の書き方に関するワークショップ
④実践論文の書き方に関するワークショップ
⑤研究方法に関する公開講座
⑥実践方法に関する公開講座

⑦特になし
その他

表１６．企画に対する要望

	回答者数（回答数）	ポスター発表	情報交換会（大学院生・教職大学院生の交流会等）	研究論文の書き方に関するワークショップ	④実践論文の書き方に関するワークショップ	研究方法に関する公開講座	実践方法に関する公開講座	特になし	その他
Ⅰ 教職大学院生	35	4	10	14	16	19	18	4	1
%		11.4	28.6	40	45.7	54.3	51.4	11.4	2.9
Ⅱ 大学教員・研究者	145	52	37	44	43	71	59	24	7
%		35.9	25.5	30.3	29.7	49	40.7	16.6	4.8
Ⅲ その他の方	128	31	30	50	53	66	72	18	4
%		24.2	23.4	39.1	41.4	51.6	56.3	14.1	3.1
計	308	87	77	108	112	156	149	46	12
%		28.2	25	35.1	36.4	50.6	48.4	14.9	3.9

全回答者数（回答数）は 308 人であり、内訳はⅠ教職大学院生が 35 人、Ⅱ大学教員・研究者が 145 人、Ⅲその他の方は 128 人であった。

最も希望が多かったのは、⑤研究方法に関する公開講座であった。全体で 50.6%、Ⅰ教職大学院生は 54.3%が、Ⅱ大学教員・研究者でも 49.0%、Ⅲその他の方は 51.6%が回答した。

次に多かったのは、⑥実践方法に関する公開講座で、全体で 48.4%、Ⅰ教職大学院生は 51.4%が、Ⅱ大学教員・研究者でも 40.7%、Ⅲその他の方は 56.3%が回答した。

三番目に多かったのは、④実践論文の書き方に関するワークショップであった。全体で 36.4%、Ⅰ教職大学院生は 45.7%が、Ⅱ大学教員・研究者でも 29.7%、Ⅲその他の方は 41.4%が回答した。

四番目に多かったのは、③研究論文の書き方に関するワークショップであった。全体で 35.1%、Ⅰ教職大学院生は 40.0%が、Ⅱ大学教員・研究者でも 30.3%、Ⅲその他の方は 39.1%が回答した。

五番目に多かったのは、②情報交換会（大学院生・教職大学院生の交流会等）であった。全体で 25.0%、Ⅰ教職大学院生は 28.6%が、Ⅱ大学教員・研究者でも 25.5%、Ⅲその他の方でも 23.4%と回答した。六番目にあたる①ポスター発表は、Ⅰ教職大学院生 11.4%よりも、むしろ、Ⅱ大学教員・研究者

の方が 35.9％と希望者が多かった。つまり、②情報交換会（大学院生・教職大学院生の交流会等）と反対の傾向で、ポスター発表は、Ⅱ大学教員・研究者が思うほどには、Ⅰ教職大学院生で希望している人は多くなかったと言える。

自由記述としては次のものがあった。

・今のまま理論について深く議論を行うことができる場
・教師教育や教員養成に関するラウンドテーブル
・大会開催地域の実践家を招いたワークショップ
・複数の小講演会
・研究者による渾身の研究発表を聴きたい。
・発表後に、助言者の先生のご指導を受ける時間

おわりに

昨今の教職大学院化への動向を受けて、本学会会員及び大会参加者の皆様に、上掲のようなアンケート調査を実施させていただき、今後へのご要望や教職大学院を中心とする現状を調査して整理を行った。回答率が必ずしも高くはなかったが、今後学会としてどのような施策や見直しが必要であるのかを、共に考え議論する一助となれば幸いである。

本アンケート調査にご協力いただきました会員や学会参加者の皆様に、改めて心より感謝申し上げる。

全国大学国語教育学会　調査ワーキング・グループ
足立幸子・奥泉香・羽田潤・篠崎祐介